

季刊『寺楽寿』は東京都世田谷区北烏山の法華宗（本門流）

本覺山妙壽寺が発行する寺報です。

檀信徒の皆さまをはじめ、妙壽寺にご縁のある皆さまに
広くお読みいただければ幸いです。

本覺山 妙壽寺 〈法華宗（本門流）〉

〒157-0061 東京都世田谷区北烏山 5-15-1

電話 03-3308-1251 FAX.03-3308-7427

ホームページ http://myojoyuji.or.jp

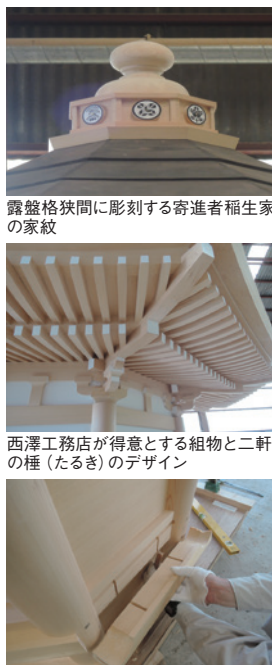
当山猿江別院本堂
内陣八角宮殿造営進捗中

年内竣工をめざす猿江別院建設において、1階本堂内陣に安置される八角宮殿（はっかくくうでん）が滋賀県彦根市・篠西澤工務店による製作で進められております。

8月4日には、監修の三浦清史先生（こうだ建築設計事務所）が現地に赴き、打ち合わせ・視察をされました。



完成間近の宮殿



地長押を千切（ちぎり）で固定するディテール

露盤格状間に彫刻する寄進者福生家の家紋

西澤工務店が得意とする組物と二軒の檼（たるき）のデザイン

無縁社会と寺縁その23

今年の夏も猛暑日の続く暑い夏となりました。

7月・8月は東京から始まり、全国各地で盂蘭盆会行事が行われ、本年、新盆を迎えた方々も多くおられ、初めての仏様をお迎えになり、故人とご自分と共に仏道修行を通じて成仏を勧められたことと存じます。

あるお宅の新盆に伺ったときですが、施主は若い兄妹、そこに故人であるお母様のお兄様夫妻がみえておられました。兄妹は2年前にお父様を亡くされ、それに続いての御不幸でありましたが、この伯父様夫妻に色々とお相談され、心のこもったお弔いとお出来になったようです。

三十年程前は、下町のお葬儀に伺えば、町会・隣組が総出のお手伝いがあり、町会長さんの仕切、婦人会の煮炊きが行われ、自宅での葬儀が当たり前でありました。今、自宅での葬儀は稀なこととなり、時代は急速に少子高齢化を受けて葬儀の簡略化が進んでおります。

自覚するしないに拘らず、若い兄妹にとりましては、伯父夫妻はなんと心強く頼りになったことでしょう。

昔は、右を見ても、左を見ても、こういう存在が親戚近所に大勢おられました。煩い事を言うけれども、大事な時に適切なアドバイスもして頂ける、本当に有難いことでありました。このような濃密な人間関係は、今は希薄となつてしまいました。日常のふとした時に、あの人の会いたい、あの方ならばどのように答えてくれるだろうと何時も思う今日この頃です。世代は順送り、今や自らが一歩先を行って若い方々に言葉を発しなければと思うこともあります。

時代は後戻りはありえませんが、これからの時代に向けて、新しい人と人との繋がりを考えていくうえで、この何十年かの人間関係・コミュニケーションをあらためて考える事も大切なことであると思います。

鴉 鵲

寺日記

てらにつき

●5月20日 福島・今市お見舞い

当住上人は、叔父弟子にあたられる福島市立正院矢吹泰英上人をお見舞いされ、さらに日光市今市の瑞光寺高村法顕上人を訪問されました。

●6月11日 大本山鷲山寺晋山式

千葉県茂原市・大本山鷲山寺では、新御貫首佐藤日賢親下晋山式が盛大に奉修され、祝賀会が開催されました。（写真①）

●6月19日 江岸寺第一周忌

当住久美夫人の叔父にあたられる駒込富士前・江岸寺前住職来馬達朗老師（履春達朗大和尚）第一周忌が奉修されました。

●6月20日 全日本仏教青年会 支援の会

会場…帝国ホテル

●6月22日 日蓮聖人門下連合会身延理事會

会場…身延山久遠寺

●6月23日 東京教区宗務所総会

会場…人形町・宗務院

●6月27日 総代責任役員会

会場…帝国ホテル

●7月2日 婦人会森貞子さん逝去

長らく婦人会に在籍された日本橋・ときわ木（和菓子製造販売）主人森宗一郎氏母堂森貞子刀自（慈楽院妙宗日貞大姉 享年88歳）が逝去されました。

同4、5日、当山本堂において、通夜、葬儀が肅やかに奉修されました。心よりご冥福をお祈りいたします。（写真②）

●7月9日 正隆会講師勉強会

正隆会恒例の興隆学林教授・平島盛龍先生による特別講義「日蓮聖人の拝まれた御本尊」が講演され、その熱気溢れる講義に聴衆一同聞き入りました。

●7月16日 当山盂蘭盆会お施餓鬼法要

連日の暑さが少し和らいだなか、当山盂蘭盆会お施餓鬼法要が奉修され、新盆ご家族80余名はじめ、500名近い方々にご参拝いただきました。

宗務院 DIARY

5/31 ▶ 内局会議 6/30 ▶ 興隆学林前期開講式・学林宗務院連絡協議会
6/20-21 ▶ 宗門誌編集委員会 7/22 ▶ 宗務顧問会

正隆会・秋のウォーク

10月7日 金 キューピーマヨネーズ 仙川工場見学
& 落語と仏事問答 詳細は別紙案内

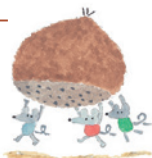
募集

本年も11月3日のお会式法要にあたり「七五三」の祈願法要が行われます。檀信徒の皆様には、お子様、お孫様、ご親類のお子様等にお話いただき、ご祈願とご先祖様にご報告いただきますようご案内いたします。（詳細は、別紙参照）

墓地部から墓地内清掃についてのお願い

- お檀家墓地内の樹木を切るときは、事前に墓地管理者（担当：西澤）までお知らせください。また、墓地内に設置してある屑籠（管理棟前）の中には木や枯木のゴミ、草を絶対に入れないで必ずお持ち帰りください。
- 落葉につきましても、持参した袋に入れて屑籠（管理棟前）横に置いてください。ご協力をお願いいたします。

妙壽寺 2016-17 秋冬春スケジュール

9月22日 木 秋季彼岸会 中日法要
11月3日 木 御報恩会式（御会式）
12月23日 金 御焚き上げ法要
1月1日 日 元旦国持会
2月3日 金 節分会
3月20日 日 春季彼岸会 中日法要

正隆会

【SHORYU-kai】

午後2時開催

月例講

ご案内

当山では、毎月第2土曜日午後2時より月例講正隆会を開催しております。仏教や法華経についての勉強会や写経会、またウォーキング課外活動を行っています。檀信徒、ご友人どなたでも参加できます。例会では、毎回1時半より正隆廟前法要を奉修しております。

9月10日（土）講義：草木成仏について 講師：渡部憲吾上人
10月7日（金）課外活動・秋のウォーク（上記参照）
11月12日（土）写経会
12月10日（土）三千遍唱題行 勉強会「法華経の略要品」拝読-2-
1月14日（土）初題目、勉強会「法華経の略要品」拝読-3-
2月11日（土）写経会
3月11日（土）東日本大震災第七回忌・東京大空襲追悼会

平成 28 年 11 月 19 日（土）於 妙壽寺本堂

第一部 一之輔独演会 春風亭一之輔

開演 14:00（開場 13:30）

第二部 竹灯籠能「菊慈童」 浅見慈一

その他出演者：馬野 正基 小早川 修

小早川 泰輝 他

開演 16:00（開場 15:30）

今、最も注目されている新進気鋭の断家、春風亭一之輔師匠の独特の語り口を聴いたあと、竹灯籠と菊の花に囲まれた能舞台をお楽しみください。

一之輔落語×竹灯籠能「菊慈童」

あらずじ、魏の文帝に仕える臣下が、主君より「レ」ッ縣山の山奥へ薬水の源を探れ」と勅命を受けて探索に赴く。人通ぬ深山の果て、そこは菊が咲き誇る仙家の秘境であった。菊の花に囲まれた庵が一つ。庵には永遠の命を得て、世を楽しむわけもなく、また夢を抱く事もないまま、終わらぬ生命の愛に身を任せて、美しい少年達の慈童がいた。

◎入場料（全席自由）
一部・二部通し券 一般 6500 円 学生 4000 円
一部のみ 一般、学生共に 2000 円
二部のみ 一般 5000 円 学生 2000 円
◎チケットお申込み
カンフェティチケットセンター
9月6日からの取扱いです
TEL:0120-240-540（平日10時～18時）
当山でもチケットをご用意しております。
◎お問い合わせ…代々木果道会
TEL:03-3370-2757（平日10時～18時）KUGENJIMA @ SAN FRANCISCO
鶴沼・桑港から

晴明庵▶7月23日 快晴の中、十余名が参集して盂蘭盆会が奉修されました。本年は安田顕実師（安祥院日實大徳）の新盆供養が行われました。

8月23日 恒例の伊東海施餓鬼法要が伊東駅近くの楠山豊治氏宅ご宝前にての唱題修行、引き続き、はるひら丸に乗船し宗祖伊豆法難祖岩に向かい、水供養が行われました。

桑港▶7月31日 桑港は最高気温28度の中、30余名のメンバー信徒が参集して盂蘭盆会法要、その後、鈴木友子総代の亡夫、1967年6月19日享年39歳で逝去された鈴木得三・スティーブ氏（開悟院智融日徳居士）の五十回忌法要が営ま

ました。法要後、階下でボトラックランチン（持ち寄りの昼食）が行われました。前日には104歳で逝去された足立日出子刀自（智覚院妙壽日琴大姉）の葬儀がアシュレー・マクラミ葬祭場にて営まれました。また、新盆の黒木スギエさん、フランク池永さんの供養が行われました。



●8月20日 京都本妙院第二十七回忌

京都大本山妙連寺塔頭本妙院先代尾崎惠隆上人（本妙院日慈上人）第二十七回忌法要が営まれました。

妙壽寺とのご縁

住職 今日先生のお話を伺わせていただくのを大変楽しみにしておりました。先生のホームページを拝見させていただいて、最初に目に飛び込んできたのが、「時代を生き抜いてきた古布を美しく蘇らせたいとちりめん細工物を創りはじめました」という、先生のいわばテーマのようなことが書いてあり、「ああ、こういうことなのか」と、私なりにぼんやりとわからせていただいたところで。さて前号のインタビューでは、早苗ご総代は歴史の長いお檀家でしたが、先生とのご縁は、実は5年ぐらいいですね。そのご入檀された経緯などを伺いたいと思います。

最初に、妙壽寺にお越しになられた時の印象はいかがでしたか。

丸山 それはもう神宮外苑の中にも入ったように吸い込まれました。きっかけは、寺町通りのお寺の新聞の折り込みチラシを見て、最初に事務所の手伝いの者とお寺を見学して、すぐにここに決めようと言ったのですが、もう一軒見ようと言われ、2ヶ寺、3ヶ寺と見学して、最後に妙壽寺さんを見させていただいたとき、「いやー、すてき」と。連れの者が戻ってから決めた方がということでそのまま帰りました。妙壽寺さんの雰囲気は最高だわと。

ゆくゆく私が家族で一番早くお世話になるから、そこだったらあの世に行っても安らかに眠れそうだなと思ったわけです。**住職** ありがとうございます。丸山家は埼玉県ご出身と伺いましたか。**丸山** 埼玉のほうに祖父が住んでいました。そこからお墓を移転されたということ

です。前のお寺さんには、今もご挨拶に行かれるとのことですね。**丸山** ええ。時々お手紙とか電話で連絡はあります。家族ぐるみのお付き合いもあり、大変お世話になりました。祖父は、長野から上京してから川越に住んでいまして、後に病床の祖父が「俺が死んだら何とか蓮光寺さんに入れてもらいたい」と。それで私の主人が、蓮光寺にお墓をお借りしたことを伝えたら、翌日亡くなりました。

魅せられた古布との出会い

住職 そういうご縁の上でご入檀されましたが、その後、先生の作品をご寄贈いただいたり、私の家内が先生に古布のことであるいろいろ教えていただいたりする中で、先生の活動を少しずつ私も知るに至りました。先生ご自身はどちらのご出身ですか。**丸山** 福島県いわき市です。

住職 いわき市は、当山のお檀家さんの旅行会などで何度か伺っています。それで先生が古布を扱うようになったきっかけは…。**丸山** とにかく布が好きで、特に古布が好きでした。好きになった出会いというのは、戦時中、私と弟が母の実家の上遠野(かとおの・いわき市)に疎開したときに、あまりにも弟が泣き虫でうるさいものだから、面倒が見られなくて、私一人の疎開になってしまいました。夜になると母が迎えに来ると思い、毎日外に出て母を待っていました。いつになっても私が家に入らないのですから、ひいおばあちゃんが私に着物の端切れで袋をつくって中に煎り豆を入れてくれたのです。その袋をいつも大事に持っていました。それがちりめん細工を創るきっかけとなりました。

住職 それで上京されてから、武蔵美(武蔵野美術大学)に入学されたのですか。**丸山** いえ、今、武蔵美の4年生です。その前に京都造形芸術大学で学び、それから武蔵美に入りました。今から4年前にくも膜下出血で倒れ、40日ぐらいいの世に行っていました。それで昏睡から目が覚めて、ああ、もうこれは、川越の蓮光寺さんは遠いので年に何回も行けない、やはり近くにお寺を移さなくてはと思う、お墓を探しはじめたのです。

住職 ご幼少の頃に古布との出会いがあった作品を創り出したのは20代、それとも30代の頃ですか。**丸山** 20代で、気がついたら創っていました。

「お蚕さま」と呼ばれるわけは

住職 先生にインタビューするにあたって、私は古布などに全く素人なのですが、家内か



ギャラリーの作品を背景に丸山氏と当山住職(表面に作品の一部掲載)

らいろいろな話を聞いたところ、そもそも布地には染めと織りがあるのですか。**丸山** はい。ちりめんは織物です。

住職 先生がご注目されたちりめんというのは、現代と昔とは大分違いますか。**丸山** 違います。

住職 蚕を飼うためクワ(桑)を栽培して繭を生産し、生糸(絹)が出来上がるわけですが、繭の育つ環境、成長などが違う中で、繭も小さく弱い、だから切れやすい、そういう自然の中でできた糸で、職人によって染色されたのが古布ということですね。その後、日本の近代産業の先駆けとして、養蚕業が盛んになり工場で大量生産するようになりました。先生は、工場生産になる前に創られた古布に注目されたのですか。

丸山 そうです。蚕農家は、自分たちの住まいの2階で蚕を育てていて、一緒に生活していました。**住職** お蚕様といって。**丸山** そうです。虫に「様」とつくのはすごいことだと感じたのです。普通、虫は虫なのに、繭は「繭様」ではなく「お蚕様」。これはすごいことだと思いました。衣食住の中で「衣」が一番初めに来て、「食」「住」と続く。食はとにかく、住まいは、それこそどこでも寝られると。昔は衣一つで、身分や職業が見分けられたのです。だから、日本はもとより、中国や韓国の時代劇を見ると、王様にしても、お妃にしても、衣で決まりますね。

住職 卑近な話ですが、僧侶にも「僧階」という階級がありまして、それも要するに衣の色なのです。**丸山** やはりそうですか。

住職 それから、私は相撲が好きで久しぶりに今年1月の本場所、両国へ行きましたが、行司さんの服装は、力士の番付で段階に行司さんが変わり、半ズボンのような装束からだんだんよくなって、立行司は立派な装束になります。それは、先生がおっしゃるよう身分とか階級がわかる。それから、浮世絵も髪形や着物でわかります。**丸山** 江戸時代あたりの着物というのは生地が非常に薄いです。ということは、糸がかなり細く、撚り(より)を細くしてある。それで、繭も現代のように大きくなく、小さかつ

た。だから、いかに薄く1枚の布を織っていたかということ。

住職 聞くところによると、中国の織物芸術で本当に良いものというのは、実はその織り手が十二、三歳ぐらいの少女だそうです。それは指が小さいため繊細に織れるようです。

丸山 この薄いちりめんというのは、現代でもそんなにもうつくられていません。京都の学校に通学して本当に良かったと思うのは、ちりめんで扱っている問屋のお嬢さんが学友であつたこと。今でも取引をお願いしています。京都へ行かなかつたらその問屋さんとおつき合ひもなかったでしょう。東京で買うとなつたら、地方から集めてきたものは、なかなかこれだというのがないですね。

美しく蘇るから「美サイクル」

住職 本来の古布に先生が注目されて、それを材料としたて創られた作品は、人間から動物、あるいは昆虫と多岐にわたっていますが、どのような着想で創られるのですか。**丸山** 結局、明治、大正、昭和、古くは江戸時代の布を見たときに、これはもう日本の文化遺産だと思いました。この文化遺産をこのまま筆筒に眠らせたままとか、間違えてゴミに出されたりしてしまうことが多々あるわけです。そういう中で、何とかこれを美しく蘇らせることはできないかなと。今「リサイクル」という言葉がはやっていますが、私は美しく蘇る「美サイクル」という言葉があったらいいなと思います。それで、人のまねをするのではなく、自分でいろいろ形を創って、この一枚の平たい布を何とか立体化すればもっと見方が違うのではと。布だけで見ると見本帳みたいにくぐられてしまいます。

住職 古いものを古い形で古いままにつくるというのは古典ですね。**丸山** そうです。**住職** けれど古典ではなくて、現代に生活している我々が、古いものを蘇らせ、目をとめさせるものを創るという発想は、先生の人生観とか思いの中からですか。

丸山 はい。私には、師匠にあたる人はいないので誰かに教えられるわけでもないの。今度はどうなるのを創ろうかな、と一人で考えてきました。今は干支シリーズにとりかかっています。例えば巳年のヤマタノオロチの神話の世界では頭が八つ、姫を七人呑み込んだということはわかっていますが、実際に見た人もいないし、絵に描いた人もない。では、最後はどのようにスサノオノミコトにやられ、死んでいったのか。それを鮮やかに作品に表すには、わらばつち(稲藁で編み上げたもの)の中に潜り込んで、火をつけ、苦し紛れに蛇が出てきて、それでお腹に飲み込んだ蛇たちは消化されていなくなっているんですが、赤ずきんちゃんの場合は、オオカミのお腹からひょっと出てきたから、やはり姫たちも上のほうに上げておいたほうがいいかなとか、そういう発想ですね。そう、これだけでいいと、夜中に思いついたら…。

住職 描きとめておかれる。**丸山** ええ、絵を描いておきます。例え

ば、辰年の辰を創る時、私は画家ではないから、何とかちりめんの古布を使って辰の動きを見せたいと思い、雲海に雲を浮かべて、この雲と雲海をどうやってつくつたらしいのかしらと。千住先生の絵を参考にして、スプレーで雲の動きを出してみました。白龍と青龍と八本の手のある八臂弁財天の財宝を守っているところをつくりました。これが認められて、フランスの美術協会からトリコロール勲章をいただきました。

住職 古布を細工物として、いろいろな形で先生のイメージネーションの中で作品が生み出されていくのはすごいなと思います。先生の御略歴を拝見しますと、2009年以降のこの6、7年は特に海外での評価が高いですね。日本の織物を使つての先生の芸術に対する評価というのは、大変なものだと実感しています。海外との交流や活動、あるいは、美術館との接点はどうにあるのですか。

丸山 どこで知って私に連絡してくるのかしらね。例えばバリのワイン倉庫街だったところにあるベルシー美術館の館長から作品をワインラベルにと依頼がありました。

住職 ワインラベルに作品の写真をということですね。**丸山** そうです。私、これをきっかけに、これから少し版画を勉強してみたいと。自分の作品は1点限りです。浮世絵だって原画1点だけだったから、これだけ普及しなかったでしょう。版木を使つて版画にして刷ることによつて大量の作品ができるわけです。よし、これからはもう版画だと思いました。自分の作品を全部版画にしてみようと。やはりこれも、何か感性を磨きたいという思いですね。

住職 ああ、すごいな。**丸山** 入院中の昏睡状態のなか、命を助けてもらったのはペンギン(JRのSuicaキャラクター)なんです。JRの車内電光掲示板に映るペンギンはプレスリーのまねをしてギターを鳴らす姿がかわいくて。ペンギンに惹かれて、それを見たさに中央線を何度か往復してしまいました。

私が40日間、あの世へ行っているときに、そのペンギンが消灯になると現れるんです。そしてベッドの傍で「どうしたの? 大丈夫?」「喉が乾いたの?」「お水飲みたいの?」と、話しかけるのです。私があなずくと、看護師を呼んでくるねと言って、連れてくる。もう毎日ペンギンが一生懸命世話をやいてくれたのです。だから、そのペンギンがますます大好きになっちゃってね。

結局、ほかの大学では、例えば染色なり陶芸なりを専攻すると、ほかの工芸ができないです。私はものづくりが好きですが、ほかのものはつくらせてくれない。武蔵美、多摩美、女子美は私の望む染色コースがなかったのです。それで京都造形大学で学びました。今は武蔵美にお世話になっていますが、やりたいことがあつたら、金工、木工、版画、それこそ陶磁器でも工芸でも何でも履修できます。これはきつと感性を磨いてくれるねと思いついて、今こうして、自分の作品を版画に彫っています。やはり感性というのは、塾とかカルチャーセンターでは磨けないですね。武蔵

美を選んでよかったです。

住職 どうも日本の場合には、いい面と悪い面で専門化し過ぎるくらいがありますね。海外の大学のように、とりあえず教養でいろいろなことをやってみて、その中から自分がいいものを選びなさいというのは、ちよつと違いますね。

丸山 違いますね。

住職 海外のほうが間口は広いですね。でも、さきほどのペンギンの話は大変感動しました。そういう啓示は西洋の宗教に限らず、日本の神々や仏様は、動物との出会いのようなものがありますね。妙壽寺の本堂階下の彫刻には文殊菩薩が獅子に乗っていますが、文殊菩薩と獅子という組み合わせです。ちなみに普賢菩薩は象ですね。

昨今、日本文化の継承は難しいと言われています。例えば1つの例として、一昨年の伊勢神宮さんの式年遷宮(しきねんせんぐう・20年ごとにご神体をうつす)です。社殿、装束や神具調度品もすべて新しく入れ替えられますが、これらはみな、人間国宝級の宮大工や、職人たちによって作られるそうです。その材料や作り手の職人がだんだん日本からなくなつてつあるそうです。式年遷宮という一つの行事が成り立たなくなるという危機感があるわけです。そういう中で残ってきた古布にまた新たな命を吹き込もうと活動されている先生は、私はすごいなと思います。

丸山 私、本当は「古布」という言葉を使いたくないです。「時代裂(ぎれ)」とでも、時代を生き抜いてきた裂、そういうふうには思いたいですね。

檀家として望むこと

住職 300年ほど前の江戸時代から現代に至るまで日本の着物の材料として作つたのがちりめん細工ですが、その作品を通して日本文化の伝承と普及に努めてこられた先生に敬意を表します。また、妙壽寺のお檀家としてこれからもいろいろとお教えいただきたいと思っています。最後に、新しいお檀家として妙壽寺に求めること、要望がありますら、お聞かせください。**丸山** 一つだけあります。妙壽寺さんは多くのお檀家さんがいらっしゃいますが、お参りに行ったとき、自分のところの墓石がいつもきれいだつたらいいなと…。希望の方には墓石管理をお受けします、こういう通知をお便りの中に一つ入れていただいたら、喜ぶのではないと思います。何だつて今、お参りだつて頼む時代でしょう。**住職** そうですね。お墓参りの代参のようにいろいろなすばらしいお話を伺い、先生のちりめん細工に対する情熱というのを非常に感じました。多くの教え子さんたちが、先生の精神を受け継いでおられるということも承っております。どうぞ今後ますます活躍をされますようお祈り申し上げます。**丸山** 頑張らせていただきます。**住職** 本日はお忙しい中、ありがとうございます。(了)